

# 舞富座筋書

特 54

20

曲多原因同筆



第一目 有職鎌倉山 四幕  
 (三立目)鷹野持比場(四立目)建長寺の場(五立目)佐野屋舖の場(大詰)鎌倉殿中の場  
 中幕 老樹曠紅葉直垂 上下  
 (上の巻)白井重近陣所の場齋藤實盛陣所の場(下の巻)篠原陣首實檢の場  
 新歌舞 船辨慶 長唄囃子連中  
 新十八番之内 船辨慶 長唄囃子連中  
 大切 水鳥記熟柿生醉 常磐津  
 淨瑠璃 水鳥記熟柿生醉 常磐津  
 役割  
 三浦荒次郎義澄 市川左團次  
 佐野の若徒勇助 市川左團次  
 長等射水ノ藤太 市川左團次  
 木曾の冠者義仲 市川左團次  
 武藏坊辨慶 市川左團次  
 甚鉄坊常赤 市川左團次  
 將軍實朝公 市川左團次  
 長井齋藤 市川左團次

手塚の太郎光盛 市川團右衛門  
 六浦左官長綱 市川團右衛門  
 高橋坊海尊 市川團右衛門  
 常陸松尾造酒 市川團右衛門  
 神主御臺山吹 市川團右衛門  
 義仲の御臺山吹 市川團右衛門  
 梓巫子熊田八 市川團右衛門  
 三浦の臣熊田八 市川團右衛門  
 天東九郎助六 市川團右衛門  
 王下嘉右衛門 市川團右衛門  
 道具屋嘉右衛門 市川團右衛門  
 橋次中助 市川團右衛門  
 眞柄舍人之助 市川團右衛門  
 女非人拾婆 市川團右衛門  
 笑宿禰 市川團右衛門  
 伊豆右衛門尉 市川團右衛門  
 白樺軍伴光 市川團右衛門  
 堀太景光 市川團右衛門  
 陶圖之進 市川團右衛門  
 女非人黒江 市川團右衛門  
 里見太郎 市川團右衛門  
 林六郎 市川團右衛門  
 遊女三郎 市川團右衛門  
 白樺三郎 市川團右衛門  
 源九郎義重 市川團右衛門  
 源左衛門妻玉 市川團右衛門  
 呼出師匠水鳥代 市川團右衛門  
 野出明石木鳥代 市川團右衛門  
 今井源左衛門 市川團右衛門  
 今井源左衛門 市川團右衛門

丁稚與茂常胤 中村仲太郎  
 千葉之助常胤 大谷門藏  
 伊勢三郎能盛 市川猿十郎  
 神保内記 市川猿十郎  
 中保五百平 市川猿十郎  
 榎次中角藏 市川猿十郎  
 須山物屋幸七 市川猿十郎  
 小野長等兵内 市川猿十郎  
 入善太郎弘經 市川猿十郎  
 片岡八郎之助 市川猿十郎  
 宇賀右門之助 市川猿十郎  
 眞野下四郎重直 市川猿十郎  
 源右衛門母真弓 市川猿十郎  
 長井齋藤五真弓 市川猿十郎  
 勇婦巴御前 市川猿十郎  
 水主岩作 市川猿十郎  
 底深娘子 市川猿十郎  
 結城七郎友光 市川猿十郎  
 根野五郎景光 市川猿十郎  
 船頭三保太夫 市川猿十郎  
 地頭坊保太夫 市川猿十郎  
 佐野別當實盛 市川猿十郎  
 長井別當實盛 市川猿十郎  
 樋口次郎兼光 市川猿十郎  
 義經次郎兼光 市川猿十郎  
 新中納言盛靈 市川猿十郎  
 大蛇丸底深 市川猿十郎

明治十八年十二月十五日

第一目 有職鎌倉山 四幕  
 (三立目)鷹野持比場(四立目)建長寺の場(五立目)佐野屋舖の場(大詰)鎌倉殿中の場  
 中幕 老樹曠紅葉直垂 上下  
 (上の巻)白井重近陣所の場齋藤實盛陣所の場(下の巻)篠原陣首實檢の場  
 新歌舞 船辨慶 長唄囃子連中  
 新十八番之内 船辨慶 長唄囃子連中  
 大切 水鳥記熟柿生醉 常磐津  
 淨瑠璃 水鳥記熟柿生醉 常磐津  
 役割  
 三浦荒次郎義澄 市川左團次  
 佐野の若徒勇助 市川左團次  
 長等射水ノ藤太 市川左團次  
 木曾の冠者義仲 市川左團次  
 武藏坊辨慶 市川左團次  
 甚鉄坊常赤 市川左團次  
 將軍實朝公 市川左團次  
 長井齋藤 市川左團次

手柄と申物(常)直様御前へト這入(義)ソレト跡追て此仕組宜敷此道具廻る本舞臺元の道具へ戻る(刑)丹頂を何者が射留しや早く知らせが有心よいがト向うみて(七郎)アイヤ其大鳥只今夫へト(七)先(義)(常)出(七)ハッ我君へ申上る是成大鳥常世が射留してム升るト常矢がらを抜んとする(義)佐野氏待れよ鶴ハ彌々貴殿れ功名でムる(常)某が射留したれを(義)イヤ手前がナソレ兼て手前にお頼の彼一條ト本願安堵のお頼を貴殿の手柄と仰有るハ矢がらの見違ひ此義澄が射留たでムらうがなト(常)成程一應改メぬが拙者が不念ト矢がらを差違見て誠にコリヤ貴殿の矢先(義)何んと某が矢先でムらう左すれば射留しハ此義澄ト敵役(皆々)義澄を譽常世を悪く云(義)佐野氏も某と見違ひる様射らさしハ中々感心な事でムる友光殿君へ御披露下され(七)ハッ我君義澄へ御褒美下し置れ升う(實)今日の功名當家の記録に殘すで有う(義)眞加余る身の面目(實)此品褒美に遺す(義)スリヤ其品迄某

に(實)イヤ此一腰の常世に遣す(義)スリヤ無功の常世へ  
 (實)射術の武士の心がけ左もなき手柄を稱美なし記録に  
 残すを不足と申す(義)イヤ全以てト誦詞堂に成(實)友光  
 此品常世に遣せ(七)ハツ佐野氏君賜頂戴召れ(常)小身者  
 の某へ有難頂戴仕升る(七)君よの暫時設ケの仮家へ(實)  
 旁々來れ(皆々)宜敷此道具廻る  
 本舞臺同休息所の体向う從(運八)出若旦那義澄様よか目  
 に掛りたい物だト(義)出運八でないウ(運)大股様より  
 過急の御狀ト(義)誦終り(常)出義澄服是よムつたウ(義)  
 何んぞ御用でも(常)サア先刻の一義お頼の節仰有本領  
 安堵まつた系圖の一卷御返有様御親父へお執成を(義)左  
 様な事一向に存升ぬト行を引留(常)功名をお誦申た時  
 御契約の義を(義)ヤア跡方もなき其雜言殊々系圖を返せ  
 杯とい何んの戯言先祖三浦大助從曆前たる武功の家柄小  
 身者の系圖を借んや馬鹿な事を(常)スリヤ日外御覽入  
 シ佐野家の系圖まつた本領安堵の願ひ御執成の義御承知

有て譲りし功名手の裏返す詞の轉變扱の功名を掠取ん工  
 成るウ御返答が承りたいト急度成此道具廻る  
 本舞臺都て鎌倉在体後よて還御ト呼(實)先よ(皆々)附て  
 向うへ這入(常)出跡見送り(義)の落せし狀を拾見て宛名  
 のかけれど三浦親子が反逆の企ト松へ目を付悪事の根ざ  
 しの若むへ從切て捨なバ老木の自然と枯るの道理ト忠孝  
 ニツの車の兩輪思案の極意ト松を切らんとして斯うで  
 はないトト此摸樣宜敷幕  
 (四立目)本舞臺都て建長寺廣間の体向うにて(呼)御代參  
 の御入ト(任僧)(所化)出迎う(義)澄先よ(刑部)(細川)千  
 葉(荏柄)(陶)(神保)(須山)(結城)(六浦)(里見)此外大  
 小名(大勢)出(義)當寺の住職勤行太義も存る(住)ハツ此  
 度願朝公廿七回忌の御追福當寺に於て御修行下さる段他  
 山の面目此上やいわん(義)武將頼家公の御代參として三  
 浦荒次郎義澄ト銘く名乗(住)各々様に御苦勞の御參詣  
 (義)出迎ひ太義(住)イヤ御案内をト先に立(皆々)附て與



へ這入此道具廻る

本舞臺都て本堂の体爰に(大名)皆々居並び(住)北條家の  
 御代參の佐野常世殿と承り升たが今以て御出なき(大)  
 小身者故諸侯の中へ出られぬ管ト(僧)出北條様の御代  
 參只今是へト云捨這入向う從(常世)出御出頭始め各々方  
 御早き御參詣(細)常世殿殿中との事變り(七)佛事供養の  
 寺院なれば是へ(常)ハツ(義)アイヤ國主の各々と事變り  
 倍臣外様れ常世烈座致す法にムらぬ(常)ハツト扣へる(住)  
 前座の誦經終りし上の御焼香遊シ升ト(義)先に(皆  
 々)焼香終つて(住)北條家の御代參御焼香召れ(常)ハツ  
 ト焼香有て下へ扣る(住)靈前の供物を卸シ先例の如く御  
 名代の御手づのら御供物配分遊され升ウ(義)各々御供物  
 頂戴召れト銘く名を呼配分の件有つて(義)烈座の旁々供  
 物配當能なるの(皆々)有難頂戴仕てムり升る(住)此上の  
 方丈よて御休息(義)左様致そラト立を引留(常)御出頭小  
 身北條の名代たる某御供物頂戴をはふかれし子細

端有ての義(義)イヤ餘り未座故見落し申た御免下され  
幸ひ供物の余分ト刀の先へ貫き恭くも頼朝公の靈前へ捧  
シ供物手中へ受るの恐れ有り此儘頂戴かーやれト差付る  
(常)昔唐楚の襄王其臣郭生を疑う事有て志シを例んが爲  
劍の先へ葉を貫き與へ給ふ(義)郭生野心なけれハ口儘葉  
を喰う(常)古語又能似た此場の有様某聊異心なき心の潔  
白ト(兩人)氣味合(常)御供物頂戴仕て人升る(義)ト(大  
名)皆く思入(住)各々方より方丈にて鷹茶召上られ下さ  
り升る(義)然らば各々御同道仕らん(常)アイヤ義澄殿密  
御覽入度品がふる(義)密々と有れ心客殿にて(貴)  
暫時退席(住)イヤ御案内ト上下へ這入此道具廻る  
本舞臺都て客殿の体奥より(義)(常)出(義)シテ密事ト  
(常)此密御存でふるの(義)ヤア(常)御親子四海を握ら  
ん工ト(兩人)思入(義)知られし上ト切て掛るを引居  
(常)改ノ申さづ共御存成らん佐野ハ則本家の血縁三浦ハ  
枝葉久敷民間ニ埋シが康時殿歩中間從内奏も取入立身出

世夫故佐野の系圖を引上返却なく鷹野と云今日の始末事  
荒立なば血で血を洗先祖の恥辱今從心る誠シ御親言諸  
其本心立返るや左なくハ密書を證據ニ出やうや(義)  
カア夫ハト詰詞登成(義)ア誤たり今更夢の覺たる心  
地貴殿の諫言に取入今より心誠ニ交康時善心なすが我  
潔白(常)手の裏返す御返答希込(義)何ぞ御尤ト金打  
する(常)夫も疑ひ晴申九(義)系圖ハ耶ハ歸り返上申が  
今の密書を(常)御返シ申が別心無拙者か寸志(義)恭ヒト  
燒捨る敵役の(大名)出最御師館有て然べし(義)左様致  
らう(常)御師館と有れ心只今申シ上りた舊領安堵系圖の  
義忘却なき様(義)エ左様な事を取次隙ハ人らぬト行を引  
留(常)系圖の義を(義)ナニ身が家の系圖を借せと申の  
(常)ヤア武士たる者が金打迄して事を變ずる人而獸心先  
祖の因に引されて大事の密書を戻せーが我不覺(義)又一  
ても同性呼り穢いと蹴る(常)ムウト詰寄(義)其面何んだ  
今日た武將も同前手向の致さば親兵衛も科ハ同罪此義澄

ハ切れましがなト(常)無念の思入(義)何れも参らるのト  
行掛る(常)義澄待(義)用が有る(常)約せし詞を反古と  
なせし(義)反古にするの何の戯言身共ハ知らぬ(常)  
モウ此上ハト立掛る(義)不禮者めがト眉間を打(常)息込  
む此様宜敷慕

申升るイヤ佐野様の又違た物だト舉乍這入(眞)嫁女いう  
い苦勞を掛升わいの(玉)母様とした事が何も御案事なさ  
れ升るな根や與へ御連申せ(下)畏り升たト連立這入(五  
百)モ御機下郎始め勇助めも骨身を碎き御奉公の致せ  
共力盡にも行ぬケ金(玉)其様に思ふて呉る志シ夫に引替  
三浦ハ榮ふる高根の花佐野ハ日影の谷間の雪(五百)いつ  
クハ解て會稽の又よい春も人升る(玉)心掛るハ鷹野の  
風説今日佛參のお下りの遅ひの(五百)下郎めが途中迄  
行御機子を(玉)太義乍をうしてたも(五百)畏り升たト這  
入中間出ハッ申上り三浦家より御上使の御出ト云捨は入

(五立目)本舞臺都て佐野邸の体後(眞弓)(下女)掛乞(三  
人)今日ハ是非共勘定を引ト云譯をして居る(五百  
平)出お前方の云の尤尤が今暫く待て下せ(三人)イ  
ヤ今日ハ待せぬトとやう云與より(玉)出コソ五百平  
町人共ハ何しに來たのヒヤ(五百)ハイ是ハ殿様のお役付  
をお悦びに(三人)ナニ私共ハ掛取に(五百)イエウけ構ひ  
のない町人でムリ升ト隠す(玉)コソ何も隠すま及ぬ根  
や云付て置た品を是へ(下)畏り升たト小袖と櫛笄を持出  
る(玉)此品を賣拂う程は能よふ勘定をしてたも(三人  
)畏り升たト勘定をする奥様差引升て三兩残り升る(玉)  
又用事を云付る程に預て置てたも(三人)ハイ儘にお預り

(玉)日頃不和成る三浦從殿の御留守へ御使者ト向う  
從(平馬)(彌藤太)出(平)玉從殿へ主人康村殿の内意(玉)  
ナニ御内意ト(平)先達て常世殿より御頼を有りし本領  
安堵の願ひ佐野と三浦ハ元來同性家ハ傳わる左文字の刀  
玉從殿が内證で差上れ常世殿が願ひも叶うと申物(彌  
左すれば常世殿ハ立身出世家の爲を思ひ御渡なされト)

玉) 何れも内證よて御渡シ申上ラト與より百兩包を提出  
イザ御受取下さり升(平)一腰と思ひの外コリヤ金包身共  
ハ誠の武士金銀も目くれ升(彌)ハテ悪イ合點百兩と  
云左文字の一腰受取召れ(平)デモ是ハ(彌)ハテ万事の手  
前が胸まト無理引立行(兵衛)御兩所待たト出(兩人)ヤ  
貴殿ハ兵衛殿(兵)左文字の一腰ハ渡シ申金子ハ返シ下  
され(彌)借物だナト出(兵)玉笹與へ持て行(玉)ハイト  
持て這入(兵)一腰改て受取ト刀箱を出(兩人)見て(平)コ  
リヤ馬廐の猿の三番(彌)何だ歌が書て有る月影を盗心  
の愚さハ實に猿猴の手が長い柄(兵)佐野家に傳る左文字  
の印可ト(兩人)コリヤ我々を馬鹿に致すな(兵)何にも汝  
等始め三浦親子ハ馬鹿者だ(兩人)なんと(兵)誠の武士の  
目柄見ると三浦ハ此山猿の冠姿北條殿と威勢を争うハ千  
疋の鼻缺猿が一疋の眞猿を笑うに似たり此事身が申たと  
云聞せよ(兩人)其舌の根をト切て掛るを打居られ逃てと  
入(玉)出邪智深さ三浦殿跡の難儀も成らうと御案事申

升る(兵)ハテ心配致すな殊にそちハ臨月左り孕ハ男子の  
印早う初孫の顔を見せて呉(玉)有難其ハ詞御案事申ハ今  
以て我夫マのお歸りかいのハ(兵)今ハ事の悴ハ沙汰なし  
じやぞト(勇助)出大殿様與様口惜うムリ升(兵)いりなる  
事で(勇)今日御佛參の席にて殿様ハ恥辱を受シト建長  
寺の事柄を咄此上ハそれト行を引留(玉)勇助いづれへ參  
る(勇)殿様の御先途見届に(兵)ハテ某思ふ子細有ハ勇助  
來やれト這入向う從(常世)出(玉)我夫ハ下り遊し升さう  
シテお上のお首尾ハ(常)イヤ上首尾殊ハ本領安堵も近さ  
に有り(玉)夫ハ何よりト云午顔を見てお顔の疵ハト(常)  
是ハ門の瓦が落て思わぬ怪我を致した然シ今日ハ目出度  
祝ハ一献過さん酒を持ト(下)酒肴を持出向う從(傳兵  
衛)(五百)出ハ傳兵衛を同道致シ升(常)是へ來やれ  
傳)御前様御機嫌宜敷(常)コレ奥刀箱と折紙を添持て來  
やれ(玉)アイト這入(常)今日申入れた金子持參致シたり  
(傳)ハイ三百金持參致升(王)ニタ品持出シテ此品の

(常)質物に差入るのじや(玉)エ何故(常)女の存た事  
ない奥へ行ケ(玉)ハイトハ入(常)菊一文字の代金貳百枚  
改て受取ト(傳)改メル三百兩ハ渡シ申升(常)儲又受取た  
(傳)ニタ品儲よハ預り申升(常)又此金子持て町の諸  
を遣す(五百)ハイ有難ハ人升る(常)又此金子持て町の諸  
拂ハを致して參れ(五百)ハイト云乍外へ出飛だ時分ハ拂  
ハをするハ若や此問ハトハ入(玉)酒を持出(常)與ハ役目  
も滞なく相濟目出度故そちも呑やれト酒を呑(玉)三浦の  
邸へ御出有て御無念ハ晴シ遊シ升(常)何と申ト(勇)出  
建長寺の始末下郎めが御注進申升(常)スリヤ其事が相  
知れたリ(兩人)嘸御無念でムリ升(常)イヤ身共ハなん  
共思ハぬ當時出頭ハ三浦親子夫を彼景中の野暮腰振と云  
れても家名ハ大切恥辱ハ家ハ替られぬてト醉(玉)スリヤ  
武士の面ハ疵を付られ(勇)アノ御無念ハ思召升ぬ(常)  
サア成らぬ堪忍するが堪忍(玉)勇助さやト長刀を抱  
込行(常)コリヤいづれへ參る(玉)女作ハ武士の妻(勇)三

浦が邸へ踏込で(常)犬死致す(兩人)じやと申て(常)三  
浦ハ數百人の家來有リ近寄事ハ叶はぬぞそんな野暮に氣  
を持つと酒の相でも致すがよい(兩人)デモ此儘でハ(常)  
ハテ常世が力ハ頼む三浦親子に敵對杯ハ後日の聞ハ恐  
れ有り玉笹ハ離別致した勇助逆も勘當致すぞト(眞)出様  
子の與て聞升さハ何科もあハ嫁女ト云忠義一圖の勇助迄  
(常)サア夫トや主の詞を背く者共故(玉)母様コリヤ何ん  
とせうとふせうぞいのト(三人)顔見合せ泣沈(常)コリヤ  
泣上戸と見へる此金子を持て玉笹が里方ハ勇助諸共出で  
失(勇)ケ程お物の望でムらぬ(常)勇助めハ腹立上戸此  
常世ハ笑ハ上戸じやト(玉)腹痛(勇)與様も瘡でも起り升  
たり(眞)臨月なれば氣が付たのでハ有さう(勇)かせつ  
なく共ト叩(玉)らんなら横子を(勇)アモシト(三人)叩  
キ下手へ這入(兵)鎗引提出先祖の武功を穢ハ悖逆期致せ  
ト突て掛る(常)起上り一寸立廻り常世が命ハ四海の納り  
(兵)何をト又立廻りド(兵)甚盤の耳を切佐野家重代左

文字の切味(常)ヤアト(兵)我子乍道レ働さまつ此如く本  
意を遂(常)扱ハ拙者が所存の底を(兵)知らいで成らう  
のト三浦と不和の事柄云(常)今日代参の席は於てまづ此  
如く(兵)スリヤ而体をト(兩人)無念と(勇)出殿様の御本  
心を承り安堵致して△升る(常)我亡後の御兩親を(勇)御  
先途御見届申升る(常)夫にて一ツの安堵最早夜詰の(兵)  
出仕と有れを親子別の盃をト水盃の件奥まで(眞)コレ嫁  
女氣を儲え持いの(兵)氣が付たど見へる勇助介抱致せ(勇)  
ハット這入(常)此上の御願ひの殿より拜領の一腰の  
出産の子へ(兵)心得た我一腰の冥途の餞別(常)ハツ難有  
頂戴仕るト暮六ツの時計(兵)夜詰の刻限(常)幸ひ今宵  
の傳書(改)兵三浦親子の出仕を待テ(常)伺ひ寄て只  
一ト討ト立上る奥にて(下)奥様御氣を儲にト(常)奥へ仕  
打(兵)未練で有う(常)ハット走り這入赤子笛(兵)そりや  
出たハト奥へ仕打氣を替鎗を持向うへ行掛る赤子笛氣を  
様事宜敷(眞)出兵衛殿孫が産れ升たわいな(兵)ッテ男子

り女子の(眞)男子じやわいの(兵)と日の目見れと親知  
らす(眞)悴一ト目ト(勇)産子を抱出大殿様に何れへ  
御出さされ升(兵)悴が先途を見届(勇)れ心とやるの尤  
乍せめてお顔を(兵)チ孫のト時の太鼓(眞)登城の  
刻限(兵)ムウト向うを見込む赤子笛(勇)仕打此摸御宜敷  
幕  
(大詰)本舞臺殿中大廊下の体茶道(兩人)出御有職のお下  
のモウ間も有まいト云乍上下へ之入向う從(常)走り出上  
手より敵役の(大色)出何者だ(常)佐野常世又人升(大)と  
れへ参る(常)御夜詰の御番に△升る(大)チ太義ト云捨  
之入(常)又(大)出名前を聞這入(七)出誰トや(常)常世  
又人升る(七)チ佐野氏方(常)御有職のお下りの(七)最  
早程も△るまいが見れば常に變り一而体方一は義も有ら  
バ一世の浮沈必ず心を付召れ(常)有難う存升る(七)夜詰  
太義と這入(常)今宵の出仕の人數もト(呼)三浦荒次郎様  
のお下りト(常)對立の影へ忍ぶ(茶道)先(義)出坊主

モウ何時だ(茶)お時計の九ツを打升た(義)太義で在つた  
休息致せ(茶)ハットは入(義)行懸る(常)前へ出(義)何者  
だ(常)佐野源左衛門御夜詰の御番△升(義)ナニ常世夜  
詰太義ト行を引留(常)義純殿お待なさ(義)何んぞ用う  
(常)サア御頼の筋が△つて(義)某へ頼とい(常)サア其お  
頼のハト云乍振打切ル(義)アツト立身苦む此模様  
宜敷幕

遠慮致せ(遊)ハイト這入(股)此度の戦ひ味方の敗軍昨日  
貴殿の仰に平家を捨源氏方へ参らぬかどの御心腹が  
承りたい(實)去ば今の内源氏方へ随ふが宜敷のらふと  
存る故(股)余人の知らず某の武門の耻と存すれば源氏方  
へ参らぬ心腹(實)シテ各々よ(皆)股野殿と同意△  
△るが別當殿の其昔源氏方故我を進られる(實)左に  
非ず誠各々の心を引見ん爲(股)スリヤ方一敗軍の折の  
討死のお覚期よな(實)夫故大炊殿へ願ひ赤地錦の直垂を  
御赦受て△る(伊)其御心腹を聞上は打解て酒に致せラト  
遊女を呼出酒宴の件(兵)出ハツ過急の御川別當殿にはお  
蹄有る様申付△り升ト云捨は入(實)過急と有れば是非  
もないが花を見捨て歸る鷹(股)又來る燕もいへど數献重  
ねてお立被成(實)花の名残り△重ね申せラト引受香(皆  
△)仕打(遊)酌をする此模様宜敷道具廻る

(上の卷)本舞臺都て假建陣屋の体爰に(股野)伊東(重直  
(曰)梓遊女(六人)を相手△酒を香居る(軍内)(伴吾)踊  
事宜敷(役)イヤ兩人の神樂舞(皆)中△面白事有た  
(曰)次へ参つて休息致せ(兩人)ハット這入(兵)出實盛殿御  
入來△り升るト云捨は入(伊)實盛是へ参る上△昨日の  
一條尋ねし上(重)所存の程を固△中さんと向う從(實盛)  
出是の數多の遊女を築められし何ぞ御趣向で△るのな  
(曰)御意△叶とを別當殿にも伽を申付られ(實)イヤ武  
勇△震ら共女△の埒明中さぬと(伊)遊女の暫時次へ(曰)

本舞臺都て實盛陣屋の体爰に(齋藤五)(齋藤六)(番卒)四  
人立懸り床の淨瑠璃△成(番)遙△の御旋行御兄弟△い嘸

お勞より升り(五)其方達の御屋へ参り(六)藤太を是へ  
呼(番)畏り升たと這人(藤太)出ハッ御兄弟に能ぞ御歸  
宅ト一別以後の挨拶在て向う從(實)出過急の迎ひ(藤)  
御子息様が都より(實)何情が歸りとなつ何川在て立歸  
つた(五)ハッ若君より御暇給り父の御陣へ加り功名手柄  
を致し度(實)六代御前の守護せよ申合し詞を背立越  
しか(六)父の御背は仕らねど味方敗軍と承り若君御案  
事再る故参り下りて候なり(實)ヤア我教訓を用ひずして  
立歸るうつけ者めが(藤)御怒御尤もはムれ共ト諫る詞盡  
在て何卒御兄弟の初陣お敵し在る様(實)相成らぬ直様立  
歸れよよし長居致さば七生迄の勘當トやト兄弟押て出  
陣を願ふ件(藤)御返答のなきは御聞入はム升まい(實)コ  
リヤ藤太陳所を退出せト三人顔見合せ(實)コリヤ 兩人  
能聞よ勝負の時の運討ッ打れるは戰場の習ひ汝等は若君  
を守護なし万一の事有らば討死せよ云置事と外ない立  
歸らぬと勘當トやぞト急度云(兩人)仕打(藤)路迄拙者が

お見送りト(三人)這人(實)最早日暮明一を燈せト云乍  
奥へ入向う徒(今非)出(番)付て出怪敷曲者名を申せ(一  
今)齋藤殿に密用有て参り者(番)名前を云ね心引繼  
ト立懸る(實)出騒敷何事だ(番)怪敷是成者(實)ム、明し  
を持ト(今)を見て(實)此者の敵地へ閑者に入置シ者其方  
違ハ次へ立(番)ハットと入(今)齋藤氏にハ久々の御面會  
(實)過一昔見參の今井殿ト挨拶終つて(實)御親父兼遠殿  
に(今)武門を捨御門入行衛知れず(實)扱く惜と老武  
者道世させしよな(今)其義又付主君より御頼が(實)  
何木曾殿の御頼とい(今)主人若冠の御兄兼光と某御  
供なし貴殿の御所在へお尋申シ舊恩を申述後年又至り  
旗上致しなば其時恩を報ひんと約せし處武運に叶ひ今五  
ヶ國を切隨ひ義兵の旗上致せは命の親たる實盛殿お招中  
御介抱を申上度主人の願お問濟下されい(實)恭のふ  
れ共今の平家此度味方敗軍なす共源氏へ隨身相成ら  
ふや(今)スリヤ薬花又募万民を苦める平家の所行御存

在ても(實)善惡共々隨ふが巨下の常諫メをお用ひなき時  
は一命捨て忠義を盡す(今)左程の貴殿が源氏を見限平家  
へ隨ひ木曾殿の助ケしを(實)ろの某斗りでなく宗清の伏  
見よて佐殿始め三人り迄助ケしも池の禪尼が情かり(今)  
御身の二才の嬰兒を抱我父に養育頼りの源氏へ忠平家へ  
對し不忠ならん(實)成人の後平家の仇と知らばなぞ助ん  
や(今)夫故父の不忠の汚名を遁るごと御老休みの(實)木  
曾殿を討て汚名を雪ぐ所存(今)モシ討れぬ其時之(實)不  
忠の詫又討死致すト詞争ひの件(今)何程仰在つても討死  
の叶ふまい(實)何故よ(今)實盛の陣と見れば戦ず引揚よ  
と主君の叫乃向ふ敵なくつて討死の遂難シト(實)左程迄  
のお志が厚く射すと御傳下され(今)主君よ言上致で  
る(實)番卒を呼出シ(實)敵陣へ遣す閑者心を付よ(番)  
ハット(今)に附て入(實)仕打駒王殿を助すを平家に  
敵剛強敵の出来まい物ア我一生の誤明日最期の際よ  
至助んと在る不曾殿よりの使者コリヤ謀略をと白髪を

染る件道具廻る  
本舞臺元の道具へ戻る爰に(軍)酒に酔遊女を廻廻して居  
る向う從(伴)出(軍) (伴)抱付遊女の逃て入(伴)軍内  
殿暗だ能る(軍)飛だ邪魔が入つて女玉な(一  
伴)今爰へ高橋殿が御出で(軍)夫の大變ト(兩人)  
と入向う從(高橋)出此程よりの敗軍軍慮を碎其中よて  
遊女を招き酒宴の白杵實否を糺さんと(白)出御陣廻り御  
苦勞も存る(高)承れば遊女を招御遊興の由(白)是に深  
き子細在て日頃水魚の勇士を請招せしがお答受る聲へ  
ムらぬ(高)此程よりの御内談の定て裏切の談ト成らん  
(白)左様義(高)然らば子細をお聞せ下されト詞詰成  
(股)其子細申述んト(股)先に(伊)(重)出(股)今日酒組替  
せし我々英氣を養ふ爲(伊)明日の花々敷一戦か叶ぬ  
時の討死と(重)覺期極め酒宴をお疑ひの迷惑至極(高)  
仰よムれ共上を見習ふ下とやら女酒よふける由斷の  
基(股)我討死なすが上を見習ふ下で(高)そりや何



(股)中も憚り有れど平家は榮花よ武邊に怠り此度の  
 敗軍(白)是迄お諫お用ひなき故討死致す評義の酒宴(高)  
 勇一さか登期間上の拙者も死生を供みせん(股)ハテ頼母  
 敷各々一やなアト(皆)宜敷道具廻る  
 本舞臺元の實盛の陣屋へ戻る爰(實)白髪を墨みて染仕  
 舞早く出馬を致したハト(藤)出ヤ御主君よは髪髯を染  
 御出陣のお仕度おされし(實)明日之大事の軍警味方敗  
 走なす共某一駒踏止り討死致す覺期(藤)夫故御子息  
 をお歸り有りしり拙者も討死の有意仕らん(實)アイヤ汝  
 の跡は残り我遺言を俾へ傳與よ(藤)遺言と仰有る(實)  
 我討死と聞かぞ都へ趣き父の昔駒王丸を助け一故今平  
 家の害と成其申譯に討死なせむ若君を守護な一父の汚名  
 を雪ぎ吳よと俾へ申傳よト主従別の盃の件此撲様宜  
 敷幕  
 (下の巻)本舞臺都て在体姓爰よ百(四人)立係り居て此度  
 の軍よ平家方が負たので田畑を荒一た腹いせに落武者と

見たら擲ふるトとや云乍之入(兵内)飯櫃を抱出御主  
 人股野様が討死故漸く逃て来たが腹かゝつて歩行ぬ柄百  
 姓家で飯櫃をものして来たト手柄掴て喰う上手從(お捨)お  
 長)出落武者殿置人で喰すとわいらにも喰せて呉(兵)  
 身共の勝利の源氏方ヒや(長)勝軍の者が盗喰をする物ウ  
 (兵)ふいつ武士に向ッて慮外中と切捨るぞ(捨)弱虫に負  
 るものウト(兵)よ掴付き立廻りの内(長)飯櫃を持逃てこ  
 入(百)出お捨婆アトやねへか(捨)此侍の飯泥棒だ(百)  
 打殺せト打て掛る(兵)逃るを退てい入(長)かつうア御苦  
 勞飯に漸く有ついたよ(捨)早く歸つて喰らト(兩人)這入  
 床の淨瑠璃に成り道具幕を切て落ス  
 本舞臺都て加賀の國藤原の体爰(義仲)(山吹)侍女(巴)  
 (覺明)(光延)(石黒)(福田)其外軍兵大勢扣へ居て錦  
 軍功の詞堂有て向う從(入谷)出高橋長綱が首級御實檢  
 下さり升(義)若年の身にして適と手柄ト(覺)帳へ記ス  
 向う從(手柄)出我君御實檢下さるべし(義)シテ此首級の

名乗のいか(手)ハッ性名問と名乗申さず錦の直垂着  
 居れば大將軍ウと存候得共續く勢も候のつ尤も詞の坂東  
 訛りに候なりト(義)兼平を是へと申せ(軍)ハット這入(義)  
 山吹の巴を連陣所へ參り酒肴を整ひ予が凱陣を相待  
 れよ(山)ハッ我君御めんト(巴)(供)從ひと入(今井)出過  
 急のお召(義)手柄が持參の首級目利致せ(今)ハッ此首  
 級を如何致して手柄殿に(義)只今様子を聞所坂東託り  
 と有る柄のモン實盛まで有らざるや夫故汝を呼出せし  
 ぞ(今)實盛殿の面体に寸分相違ふらねど薄髪乍黒くと  
 白き毛なきの餘人の首級と覺たり(義)我も見參なせ一事  
 有とぞ白髪の老人なりしが髪髯共に黒くと殊に錦の直垂  
 着せ一とト樋口を是へと下手まで(樋口)只今夫へと出兼  
 光目利仕らんと首級を見て愁ひ實盛殿むざんの最期遂  
 られしよな(皆)何實盛との(樋)疑しくば洗ひ落して  
 御覽み入れんと墨を洗う(入)ヤ々忽白く變せ一(皆)實  
 盛殿にて有りしよな(樋)主君が御心碎も水の泡なる



此首級残念な事いたたり(今)斯髪髻を染られて敵を欺  
さ給ふなら某大事の洩さぬ物(義)斯成る上は是非もか  
首級に一掃述るで有うト(皆)首級を敬ひ(義)誓恩を謝す  
詞堂有つて何に手柄實盛を打取し其働きを語り聞せよ  
手)ハッお物語り仕らんと物語の件有て向う從(根)の非  
出我君是又御座有りしや御本陣よて御酒肴の用意整ひ御  
進として參上致て(義)然らぬ實盛の首級の兼光兼  
平吊ひくりやれ(樋)其義之兄弟望む所今厚く辨申べ  
し(手)我之錦の直垂を笠となして名の擧(義)一統勝鬨  
(樋)イヤ御凱陣ト引張の見得にて幕  
(中幕船辨慶)本舞臺都て能舞臺離子連中居並び諸に成  
辨慶)出ケ様に候者ハ西塔の邊り又住武藏坊辨慶よて候  
平家の一門亡びて從參者の爲又頼朝公と御中違ひ一先西  
國へ御下向大物浦へ急候ト唄に成(義)經(伊勢)伊豆(堀)  
(片岡)出(義)辨慶乗船の用意候や(辨)心得申て候ト唄此  
家の内へ案内申ト(舟頭)二人)出案内ト(辨)我等ハ武

藏にて候我君の御供申せば御宿中され候へ(船)畏てい  
(辨)御忍の御旅行御乗船をも頼申(船)心得てい御通りい  
へト(皆)住ひ(辨)静を歸せト云件有て(義)辨慶よさに  
(辨)畏ていト揚幕へ向ひ此家の内に静の渡らせい  
我君の御使に參つていト向う從(静)出何んの御使よてい  
ぞ(辨)君の仰都へ歸れト云(静)聞入なくとらのが直君  
へ申上んと唄又成(義)いかに静兄の疑ひ受西國へ落人  
の身世に出る時節を待いへ(静)扱ひ君の御錠よ武藏殿  
を恨みの面なき事にていぞや(辨)歸れと有るも世の人口  
を憚る故(静)イヤ兎も角身よりの恨のなけれ共ト唄口説  
摸樣(義)暫成り共別の益ト(義)門出の祝義舞やそト  
(静)舞の件有つて(船)出御船の用意整平い(義)乗船なさ  
ん(辨)何れも御供(皆)心得ていト(静)名残りを惜む  
(辨)得く宿へ歸りいへ(静)是非もなき事よていト唄又成  
這入(船)只今静の御歎きに我等も落涙致てい(辨)誠  
哀の事あていシテ船の用意宜敷い(船)我ハ根取仕て

(辨)急ぎ船を出ろするにてい(船)畏ていト(四人)前  
へ出君の御錠よハ風波荒くい程よ御逗留仰出さきてい  
(辨)平家追討又逆浪を乗り鬼神と云れし我君臆シ給ふハ  
女々しき事にてい(義)實と逗留と申せハ我誤りよてい  
ト(船頭)二人)船を漕出皆御船へ御乗いへト(辨)目出  
度船唄詠ひいへ(船)畏ていト舟唄又成(船)振事宜敷  
有て俄又空がト波の音勵敷船危くある(辨)向うを見て不  
思議や海上に亡び失たる平家の一門(義)何に辨慶(辨)御  
前にい(義)惡靈恨をなす其何程の事有らんと急度なる  
知盛)出抑是と桓武天皇九代の後胤平の知盛の幽靈な  
りト舞動らき宜敷(義)と切結ふ(辨)是を支へ東方降三世  
南方軍陀利夜刃明王ト祈(知)辨)の行力よ側へ寄兼る仕  
打(皆)引張の見得宜敷段切よて幕  
(大切)本舞臺一面紅葉の道具幕爰又酒戰曾の(世話役)立  
懸り居て此海案寺の山を借り名高い香拔連が寄集り角力  
の様に左右へ分ると云顔觸を貰て置た(世)ドン俺が讀で

見やうト淨瑠璃觸を讀事あつて(世)大方みんな事だらう  
と思つた(世)然シ俺達ハ是を讀ば用いぬ其爲口上左様  
ト(皆)這入知らせ又付道具幕を切て落ス  
本舞臺都て品川海案寺の体爰又(社中)四人名前帳を扣  
下手に常盤津連中居並び淨瑠璃又成向う從(鳥代)(神主)  
出振有つて(社)お二人様にこよふこそ御出シテ御姓名ハ  
(神)松尾造酒之進(鳥)私ハ踊の師匠水木鳥代ト帳へ記ス  
(神)未だ酒の關取衆ハお揃でいぬか(社)先刻御出で  
一勝負ム升たが跡御連をお待申所でいんと向う從(柳)  
づぶ六)出ふり有て(社)是ハ能こそ御出ト名を問件有て  
帳へ記向う從(龜子)(丁稚)跡より(升吉)出振り有て(社)  
是ハ大師川原のね嬢様シテ旦那様ハ(龜)父ハ御堂よてお  
住持様と御咄故私ハ先へお知らせ申し參り升た(社)夫  
でハ底深様も最早御出ふム升か(升)今門前でハ嬢様よお  
目よ掛つて俺も共(丁)れ供をい來升たト(柳次)出是  
ハ何れも能こそ御入來(皆)御招待又預り有難ふムり升

(づぶ)かいやもわいやたい(樽)底深様が御出と有れば角  
 力又取懸らふト向う從(甚)鎮坊出愚僧の甚鎮坊と申一個  
 の酒香でふる(樽)扱の貴殿が聞及ぶ御坊でふるか手前の  
 地黃坊でふる(甚)樽次殿が申テ酒殿のまだでふるか(樽)  
 只今御人來の各々を左右へ分五合入りの盃でお手合を初  
 め升か(神)シテ勝敗の成り升(社)先五合入りの盃へつぎ  
 ヨイ〜と手拍子を三ツ打内早く呑むが勝と成升す又遅  
 をた方の踊のでム升か(甚)夫ハ一興な事でふる(社)先松  
 尾氏水木氏双方見合ッて呑(鳥)負る私の負ても頭が心  
 ん懸る柄(升)ナニ俺が(鳥)今更言も愚智乍ト口説の振(一  
 社)跡の榊殿とよひ敵殿だト呑(榊)勝(づぶ)よい〜との  
 振り(樽)今度の甚鉄御坊も升吉殿でふるト呑(升)負る(一  
 甚)約束通りだ踊なせへ(升)エ〜ゆめへ〜いト振(甚)  
 此上の樽次殿と勝負が仕たい(神)西の大關と立合たいと  
 の(升)余程強いと見へる(甚)此甚鉄が大酒をまたいト  
 やべり摸様の振有て(樽)手前が相手ヌト(底深)其勝負見

物致をラト(呼出奴)を連出一寸御目見得詞盡有て(奴)振  
 有て(甚)樽次殿(樽)勝負致さんト七合入りて呑(樽)負る  
 (甚)早く踊が見たい(龜)十二ヶ月の酒盡シを(樽)踊でム  
 らラト振有つて(甚)此上の東の大關底深殿と(底)勝負致  
 さん(奴)呼出シ升ラト名乗をあげる件(樽)双方見合てト  
 呑(底)負る(甚)兩大關を負かした上の愚僧の目下開山だ  
 (龜)父の敵討に私を(甚)娘御が相手との面白ムト(龜)に  
 見とれ負る(升)ヤ和妙が負た(皆)と踊あせへ(甚)踊斗り  
 の真平だト(龜)酔た思入此芋堀坊主め踊らねへ(底)酒  
 ん酔と親さへ困る此娘ト生酔の振有て(升)俺は何だの悲  
 敷ト泣(甚)是ハ大笑ひだト笑う三人上戸の件(底)兩大關  
 ん勝て和尙を負した上の(樽)祝又爰で酒は縁有る(皆)と  
 狸と舞ト手踊りて目出度打出シ

明治十八年十月廿三日御届  
 同 十一月 日出版  
 日本橋區蠣壳町壹丁目四番地  
 編輯兼出版人 齋藤長八  
 京橋區南茅場町四十二番地  
 賣 元 中村重次郎

(定價八錢)